

# 「文化」への意志～「活字離れ」という言説

本プレゼンでは、言説としての「活字離れ」に焦点を当て、そこにいかなるメカニズムが働き、いかなる状況を生み出しているのか。どのような「権力」が働き、どのように言説が増殖していくのか。を分析し、そのことを通じて、私たちの読書がいかなる状況にあるのかを概観することを目的としている。

## 1. 言説研究とは何か

言説研究における言説という言葉は、一般的な用語法とは趣を異にする概念だ。私がこれから用いる言説とは、フーコーの概念の言説( ディスクール)である。これは、ある社会集団や社会関係によってきていされる「ものの言い方」「表現」「論述」を意味する。ディスクールは、表現の最小単位であるエノンセ( 発言行為) が集まって作られる。そして、このエノンセが、どのような規則によって、ディスクールへと編成されるのか、が問題となる。このようなディスクールを形作る形式を、「言説編成体( フォルマシオン・ディスキュルシブ)」と呼ぶ。(注1)

続いて言説研究の具体的な諸相を概観するために、まずはこれらの研究の基礎を築いたフーコーの著作にあたってみよう。

フーコーは性にまつわる膨大な言説を探ることによって、何故人は性現象について語ったのか、それについて何を述べたのか。これらの言説と、これらの権力作用と、そしてそれらによって取り込まれ用いられている快楽との繋がりはどういうものか。そこからどのような知が作り出されてきたのか(注2)。といった問いに答えようとした。つまり、言説そのものの内容を検討するだけではなく、これらの言説を支えている意思と、これらの言説を支持する戦略的意図をも検討する(注3)ものであったのである。

## 2. 抑圧の仮説 権力の多形的(ポリモルフ)な技術(注4)

権力は性に対する単純な抑圧者として存在するのではなく、むしろ語らせることによって抑圧する。つまり、性現象を禁忌とみなして語ることを抑圧するのではなく、抑

圧された存在であるということを大いに語らせ、肯定させることによって、日常的な快樂の隅々にまで「権力」を浸透させるのである（「抑圧の仮説」の否定）。このような権力に対する視座は、**言説的産物にとって支えでもあり同時に道具ともなっている「知への意志」、（注5）を浮き彫りにする。一言で言えば、このような知への意志に本来的に内在する権力の戦略というものを定義すること。性的欲望という具体的なケースについて、知への意志の「経済学（生産・配分・管理の学）」を成立させること（注6）**これがフーコーの言説研究の目指すところである。

### 3. 「活字離れ」「読書離れ」言説の諸相

本章では実際に「活字離れ」言説の分析を行う。分析の対象とするのは過去20年間にわたって毎日新聞が行っている読書調査の特集記事、およびそれに付随する社説・投書などである（注7）。まずは大まかな時代区分を設定し、その後いくつかのテーマをピックアップし分析を加えていく。

#### 3-1 言説の推移 不断の変化という規則（注8）

##### 1980～1986 <映像時代における読書の変質>

「軽読書」「映像本」「テレビの影響」「レジャー志向の読書」

**情報量は大きいかもしれないが、体系的、抽象的な思考力を養うことにかけては、読書に及ばない（注9）。教養的な読書に代わって、新しいタイプの読書が主流となりつつあるように見える。読書は（かつては）著者との対話であった。（中略）いまは、そういったかわり合いを必要としない手軽な本が好まれるようになったようだ（注10）。「写真誌全盛 週刊誌の見方は（見出し）」映像時代に育った若者ほど「見る週刊誌」が好きで（後略）（注11）。マンガや写真週刊誌の成長は著しいが、本を読むことの価値は減らない。映像に比べると、読書は読み手の想像力をきたえる度合いが違う。著者と読者の対話、という読書の本質は、いつの時代でも変わらない（注12）。**

この時期は、新たに市民権を獲得しつつある読書の形態をいかに認識するのか、その視線のあり方に特徴付けられる。当時ますます人気の高まっていたマンガや、テレビや映画をベースとした書籍（映像本）などを読むという行為は、これらの言説の中ではあくまでも読者が一方的に受容するだけの行為として捉えられ、既存の読書とは性格を異にするものとして表象された。ここでは、既存の活字文化が徹底して視覚文化

を排しようとするその姿勢である。

### 1987～1994 < 教養から娯楽へ・軽チャー時代 >

「サラダ記念日」「TUGUMI」「ノルウェイの森」「女性の読書」「マンガの認知」

「読書も女性の時代（見出し）（注13）」。若い人、とりわけ十代、二十代の女性に本好きが目立ち文芸書が読まれている。（中略）吉本ばななさんの作品の影響が濃厚ようだ。マンガ感覚とも共通する軽いタッチの"純文学"が現代の「文芸書」となっている（注14）。「社会人のマンガ認知 肯定派66%、書籍と併読（見出し）（注15）」。「経済書は人気低下 『軽読書』中高年にも（見出し）（注16）」。「いま読みたい本は 実務や実生活に役立つ本 好きな著者が書いた本 娯楽性が高く、楽しい本（中略）「しみじみと心に訴える本」や「人生の指針を与えてくれる本」などは少なく、本の役割や読書の意味も少しずつ変わってきているようだ（注17）。

この時期注目すべき点は何よりも「女性の読書」という表象であろう。これ以前から中高生の間での少女小説の受容のされ方は注目を集めていたが（1983～）、俵万智や吉本ばななの成功は既存の読書イメージを大きく転換させることとなる。「娯楽」のための軽い書物を読むことが、新しい形の読書として認知されるようになったのである（後段で詳述する）。

### 1995～200? < 活字の、そして日本語の危機（反動言説） >

「煩わしい活字」「コミック人気不動」「日本語の危機」

若者の読書離れは「文字ばかりの本はうっとうしい」が大きな理由の一つとなっていることが、毎日新聞が九月初めに実施した第四十九回「読書世論調査」分かった（注18）。「"愛蔵書"はコミック 本読まぬ子供たち（見出し）（注19）」。「日本語力が低下したのは活字離れのせい、と考える国民が3人に2人に上った（注20）」「本を読むことは大切」（「ある程度」を含む）と思う人が96%に達した（後略）（注21）。「まだまだ本好き日本人（見出し）（注22）」。「読書家ほど物知り（見出し）」（中略）読書は子供たちのポキャブラリーを増やすために大変有効であることが確かめられたと思う（注23）。

これ以前の読書の変貌に対する批判的な視点から一転、ある種の反動言説が準備されるのである。90年代後半においては「活字離れ」と「日本語の乱れ」が結びつき、かつそれが新聞のオピニオンとしてではなく、あくまでも世論調査の結果判明した事実として語られたのである。ここにおいて、読書概念は再び旧態依然の偏狭なイメー

ジを復活させたのである。

### 3-2 「女性読者」という表象が意味するもの

80年代を通じて女性読者はその数を増やし続け、新たな読者像・読書像を担うようになった。しかしその一方でこの表象は、彼女たちが読書行為に託した(かもしれない)意味内容を奪い去るものでもあった。*旅行や出張に行くとき「本を持っていく」(「いつも」と「ときどき」の計)は四十五%にとどまり、五〇%の人が「持っていけないと答えている。ところが年代別にみると、女の十代や二十代では「持っていく」が約六割に達している。若い女性にとって本は旅のアクセサリーなのかもしれない(注24)*。女性の読書に関わらず、当時の新たな形態の読書を表象するにあたっては、「軽タッチの文芸書」であるとか「マンガ的感覚」などといった表象がなされ、ここにおいてはそもそも表現されようとしていた意味内容そのものが殆ど無化される状況が起こるのである。結局こういった言説を通じて逆説的に浮かび上がってくるのは、娯楽ではなく教養としての読書像という旧態依然の概念に過ぎない。

### 3-3 「教育における読書」をめぐる言説

次に、先ほどの時代区分の中では説明しなかった、子供の教育における「読書」言説についていくつか特徴的なものを挙げてみたい。*お手伝い時間の長い子は読書量が多い。とくに小学生では、三時間以上の子が一ヶ月に9.8冊読んでいて、全体の7.4冊より2.4冊も多い(注25)*。小・中・高校生とも塾や習いごと、スポーツクラブなどのうち「何も通っていない」児童・生徒の読書量が最も少ないという結果が出た。(中略)「日常生活で不活発な子ほど本を読まない」という小・中・高校生のこの傾向は、今後の読書指導のあり方に一つの示唆を与えよう(注26)。本好きな子供に育てるには、幼児のころから、親が本を読んであげ、本の楽しさを教えるのが一番、といわれているが(中略)「第44回学校読書調査」で、やはり読み聞かせが極めて有効であることが確かめられた(注27)。幼少期、親に絵本を読んでもらった小、中学生ほど平均読書量が多いことが(中略)「第48回学校読書調査」で明らかになった(注28)。

これら一連の言説に通底するのは読書行為を平準化する戦略であり、そこで健全な、それゆえ推奨されるべき読書という表象が生み出されるのである。あるいは、とりわけ「読み聞かせ」言説を通じて現れるのは、文化資本としての「読書」の表象であり、特定の文化の形式を保護し、再生産する戦略である。

#### 4. 「文化」への意志

我々は1980年から現在に至るまでの、読書に関する様々な言説を追ってきた。ここでは最後に、これら一連の言説(言説編成体)を一つのパースペクティブの元で捉えなおしてみたい。読書にまつわる様々な言説は、それがかつてあった読書行為を賛美するものであれ、変化しつつある読書行為を否定するものであれ、そして肯定するものであれ、常に一つの固定された概念を参照していた。「文化(注29)」への意志、ここではフーコーに倣ってこのように呼ぶこととしよう。「文化」への意志は、かつて存在した近代的な読者共同体、さらには近代的な「文化」を再び構想するような意図を持って、読者の中へと分配される。現代の読者の中に、近代的な読者(注30)を再生産しようという試みがなされるのである(注31)。しかし当然のことながらこの試みは破綻することとなる。近代的な読者は何も、活字のみから「文化」を構築するわけではない。視覚から、聴覚から、そして活字から、我々が日常的に考えることを感じることで、それら全てを用いて文化を構築してゆくのである。そういった状況にいて唐突に全能の活字文化を構築しようとしても、何の意味も無い。「活字以外に文化は存在しない」というのは、他者に対する想像力を欠いた、ただの傲慢だ。**活字以外にも"文化"は存在し、そしてそれらを整理統合発展させるために、活字という思考の根源がある(注32)のだから。**

---

注1 桜井哲夫『現代思想の冒険者たち 26 フーコー 知と権力』(1996 講談社):p.317 注  
目すべきは、言説が常に複数形で表されるという点である。

注2 ミシェル・フーコー 渡辺守章訳『性の歴史 知への意思』(1986 新潮社):p.19

注3 ミシェル・フーコー1986 :p.16

注4 ミシェル・フーコー1986 :p.20 またここで述べられている「権力」という概念もまた、フーコー独特のものであると理解するべきだ。**権力は至る所にある。全てを統括するからではない、至る所から生じるからである。(中略)それは特定の社会において、錯綜した戦略的状况に与えられる名称なのである。**ミシェル・フーコー1986 :p.120 あるいはここで、ドゥルーズ+ガタリの「リゾーム」概念を参照してもよいだろう。フーコーはしばしば、ドゥルーズへの思想的シンパシーを表明している。

注5 ミシェル・フーコー1986 :p.20

注6 ミシェル・フーコー1986 :p.96

注7 資料の収集にあたっては毎日新聞の縮刷版を用い、読書調査の掲載される10月の紙面を中心に1980~2002年までのものを参照した。

注8 ミシェル・フーコー1986 :p.127

注9 毎日新聞 1983年10月28日社説

注10 同 1985年10月30日社説

注11 同 1986年10月27日11面

注12 同 1986年10月30日社説

注13 同 1988年10月27日13面

注14 同 1989年10月27日12面

注15 同 1991年10月27日1面

注16 同 1992年10月27日1面

注17 同 1994年10月27日3面

注18 同 1995年10月27日3面

注19 同 1995年10月28日14面

注20 同 1997年10月27日3面

注21 同 1998年10月27日14面

注22 同 1999年10月26日14面 ただし記事本文に対応する記述無し。

注23 同 1999年10月27日19面

注24 同 1987年10月27日 13面

注25 同 1984年10月27日 13面

注26 同 1987年10月27日 11面



注  
27 同 1998年10月28日 17面 傍点は森原

注  
28 同 2000年10月27日 14面

注  
29 人類学的な、生活習慣や慣習などの生き方総体としての文化ではなく、狭義の(文化事業などという意味での)文化、高級文化をここでは意味する。

注  
30 小田光雄および高野のプレゼンを参照のこと

注  
31 そしてこういった状況が、我々の読書をいかに不自由なものにしているか!(例えば、中学時代、高校時代、我々の読書行為はどのような視線に晒されていただろうか?)

注  
32 橋本治「増補 浮上せよと活字は言う」(2002 平凡社):p.65